

## 木會街道膝栗毛(その四)

## 〜野尻宿から須原宿まで〜

二人は、茶屋を出て宿場の中程までやって来ました。

弥「喜多さんや、退屈だね。」

紛らわせに、これから一日代わりに、

旦那と家来になって歩くというのはどうでしょう」

喜「そりゃ面白そうじゃないか。」

弥「そうと決ったら、今からまず俺が旦那だ。

てめえ、この風呂敷包みを、

お前の分と一緒にかついで来るがいい」

喜「よしよし」

弥「よしよしではならん。へいへいと言うのだ」

喜「へいへい」

弥「さあ、旦那だぞ。こりゃ喜多八、今日は好い日和だな」

喜「さようでござりやす」

と、いう具合に、二人は代わる代わる言葉を交わしながら野尻宿のはずれまでやって来ました。

すると、馬を引いた馬子が声をかけました。

馬「旦那旦那、ちょうど須原の宿への帰り馬です。

乗ってやっておくんなせえ」

弥「おう、安くしてくれば乗りましょう」

馬「安く値切るまいぞ。」

須原までたったの百文ですよ。

あそこに居られるお侍様も、

今、これから仲間の馬に乗って下さる事になりました」

弥「こりゃ喜多八。予は馬に乗るぞ。」

その包みを馬に付けよ」

喜「はいはい。かしこまりました」

弥「これ馬子、早く馬の用意を致せ」

馬「はいはい。さあござらっせえまし。

旦那、この馬はジャジャ馬だから、

気をつけて乗らっせるようにな」

弥「わしらは裸馬に乗ることすら平気だから、

こんな痩せ馬なんて何でもねえ。

こんな馬どうせろくな物を食わせてねえじゃねえかい」

馬「それでも危ねえから、この上から乗らっせいまし」

と、馬士は茶屋の前にあった床几を引き寄せ、その上から乗らせようとなりました。

弥次さんが「よいこらしよっ」と乗ろうとした時、向こうから面白い歌を歌いながら来る女達が通り過ぎようとなりました。

歌「七つ八つから手習いすれど、

切れる氣の字は習いはせぬよう」

喜多さんは、すぐに大声を上げて囃し立てたので、弥次さんもつい浮かれて声をかけようとなりました。

その上、女の人達に見られているから、声をかけざま格好良く馬に跳び乗ろうとしたからたまりません。

床几は片方に力が加わったので、跳ねるように立ってしまいました。

弥次さんは、床几の先になって地面へ仰向けに叩き付けられてしまいましたた。

弥「アイタタタター」

弥次さんは、地面に倒れたまま立ち上がれません。

顔をしかめているばかりです。

馬士は、あわてて弥次さんの体を抱き起こしました。

馬「ヤヤヤツ、これは、これは。

どこぞお怪我なさったかね。危ないことだ。」

弥「くるぶしの所がギクリとなって、アイタター。

アイタイヨウ」

喜「ハハハハ。さっき鹿島神宮のおふれでは、運の強い人というご託宣。

そんな怪我をする者が何で運の強い人なんて言えようぞ。

二百文をただで取られた大きな鼻垂らし小僧じゃねえか」

弥「やいっ、おのれ、忘れたな。」

この旦那様を鼻垂らしとは太えヤツだ」

喜「ハハハハ、本当にそうだっけ」

馬「今、お話を聞いていりゃあ、あの野尻の怠け者に旦那方は乗せら

れたようでごさすな。」

ありゃあ、泥畑の賀蔵というろくでなしなんでさあ」

弥「なにっ、ありゃほんと鹿島のおふれじゃなかったのか」

馬「とんでもねえ。」

鹿島様とは野尻の鹿島神社をもじってひっかけたのだ。

あいつの考えそうなこった」

喜「それみたことか。ばかばかしい」

弥「仕方がねえ。」

これも厄落しだと思ってあきらめるしかない」

弥次さんは、騙されて、二百文をゆすり取られたあげく、足をくじいて  
さんざんです。ようやくのことで馬に乗りました。

ところが、この馬も足をどこか痛めたのかびっこをひいてやっと歩き出す有  
様です。

弥「足を怪我したうえ、この馬からまた落とされたらやり切れねえ。」

これ馬子、馬が転ばぬように気をつけて引いてくれ」

馬「ええ、転んだらまた起こしましょう」

弥「起こすなんざしれたことだ。お前さん居眠りしながら引くからそ

んなことが言えるのだ」

馬「難しいお方だな。落ちたらまた乗ってくださいえよ」

弥「このべらぼうめ。」

この馬を転ばすと、お前の首が飛ぶからそう思え」

馬「あっ、馬が転んだらワシの首が飛びますか」

弥「しれたことだ。覚悟して馬を引くが好い」

馬「あ、そうですか。じゃあ」

弥「えっ、ちょっと」

馬士は、野尻の宿のはずれまで来ると、馬のたずなを離してどこかへ駆けて行ってしまいました。

しばらくすると、長い刀を差して戻って来ました。

弥「何だお前、俺にかなわねえと思って刀を差して来あがったな」

馬「アイ。わしも命がけたい。

お前が転ぶとわしの首がないと言われた。

それほど事を言わっしやるなら、馬が転ばずに行けば、旦那の首が飛ぶからう思うがいい」

弥「やいっ、馬士のくせして面倒な事を言うわい」

馬「とんだもはねたもいらんわい。

わしもこの宿場じゃ不精者だ。

ひねる事にかけてちゃ、むたいかない男だ。

あてこともない。」

弥「気の強ええ事ぬかしやがる。

そりやいいが、もっと早く馬を歩かせる事あできねえのか」

馬「早くやると馬が転ぶから、俺の首が無くなる。

だからそりそりそりそりそりやしよう」

と、蟻でも這うように、馬をそりそりそりそりと引くので、歩いているとも思われません。

だから、馬上の弥次さんはイライラし通しです。

喜多さんは、二人の後を歩きながら、

喜「ハハハハハ。こいつは馬士殿の方が一枚上手だぜ。

須原の宿まで一里半。

晩までかかってもいいからやっておくれよ。ハハハハハ。」

弥「ええい。喜多さんまでもがそんな事を言うとは忌々しい。いくら日が長いといったって、これじゃ埒があかないよ。

早くやっておくれよ」

馬「早くやると足の悪い馬のことだ。必ず転ぶ。

転んじゃ俺の命はない。早くなんか行かないよ」

弥「おい、喜多さんよ。お前乗らねえか。

俺はもう飽きた。もう降りる」

喜「なになに、旦那様を歩かせて、家来の私がどうして馬になど乗られましょう。ごもったくない」

弥「えーい、とんだめにあう。」

転んだって何したって許してやろう。

しゃんしゃんやれ。早くやっておくれ」

馬「おいおい、怪我をさせてもよけりや早くやりやしよう」

と、言ったかと思うと、手づなを持って馬の尻をやたらにべたべたと叩き、綱を離れたからたまりません。

驚いた馬は狂ったように駆け出しました。

弥次さんは、馬の鞍にしっかりとつかまりながら、

弥「やいやい、そつと言え止まってしまうし、ぐわつと申すと余りに

早すぎて尻が驚いて痛いよう。」

もっと静かにできんのか」

と、言うので、馬士はまたいじわるくそろりそろりと歩きました。

喜多さんは、また、吹き出してしまいました。

そうこうしながらも、ようやくのことで須原の宿へ着くと、馬士は棒鼻の茶屋の女将に長い刀を渡しながら言いました。

馬「ここのかか様。」

ざっかけの爺さまに頼まれた刀を、持ってきましたよ」

喜「旦那の首を取ろうと差してきたのじゃなかったのか。」

ワハハハハ。またまた馬士殿に一本取られましたな」

と、笑うので、さすがの弥次さんも笑い出してしまいました。